クレモナのリウトプランド『報復の書』の翻訳刊行に寄せて*

――ビザンツ史関連の術語注解と補説――

三佐川亮宏・平野智洋

はじめに（三佐川亮宏）

2023年10月末、クレモナのリウトプランド（920年頃－72年？）の手になる『報復の書』（958～62年成立）の三佐川による翻訳が知泉書館より刊行された[1]。ドイツ中世史を専門とする訳者はビザンツ史には疎く、このため校正時にビザンツ史研究者の本学非常勤講師、平野氏の助言を仰いだところ、ギリシア語テクニカルタームの難解な発音表記、訳語と概念、それにコンスタンティノープル宮殿の地図について、A４判ペーパー28頁に及ぶ極めて詳細なコメントを得ることができた。その内容は、同書の第３巻26章、第６巻10章他に反映させることが叶った。

校了後、この詳細なペーパーの内容がこのまま訳者の引き出しの中に埋もれるのは忍びないと考え、加筆修正の上で「資料解題」として本誌上で公表することを平野氏に提案し、快諾を得ることができた。

三佐川は、『報復の書』については既に本誌112輯（2022年３月、1-44頁）に、「クレモナのリウトプランド『報復の書』/ ヴァイセンブルクのアーダルベルト『レーギノ年代記続編』――人と作品――」と題して発表しており、その後改稿の上、上記訳書に「解説」として収録された（407-470頁）。このため、詳細はそちらに譲ることとし、本稿ではまず三佐川が導入として「リウトプランドとギリシア語」に限定して「解説」の内容を簡潔に紹介し、次いで平野氏による詳細なギリシア語注解に進むことにする[2]。

１．リウトプランドとギリシア語（三佐川亮宏）

> ･･･見よ！　コンスタンティノープル皇帝が余に対して使節を派遣するよう書簡で要請しているのだ。精神の堅固さの故にそれをより見事に、弁舌の巧みさの故にそれをより巧みに為し得る者は他にはおらぬ。かの者が如何に容易くギリシア語の教えを飲み干すか、それは余が語るまでもあるまい。かの者は、年端も行かぬ齢で早くもラテン語の教えを飲み尽くしたのだから（第６巻３章）。

949年、国王を凌ぐ事実上のイタリア王国の支配者たるイヴレーア辺境伯ベレンガーリオは、当時約30歳のパヴィーアの助祭リウトプランドについて、その継父に向かってこう褒めそ

やした。以下では、「お喋り好きで饒舌」[3]、強烈なまでの自己顕示欲に満ち、溢れんばかりの教養と修辞技巧をこれ見よがしに誇示する、中世前期において他に類を見ない程に個性的な人物と、ギリシア語の接点について紹介する。

【リウトプランドのコンスタンティノープル使節行】

リウトプランドの生地は、ランゴバルト王国の旧都パヴィーアと推定される。ランゴバルト人系の出自であったことは確かだが、家門が裕福な遠隔地商人であったのか、パヴィーア宮廷と伝統的に繋がりを有する都市貴族であったのかについては議論がある。

不詳の名の父は、イタリア国王ユーグ（在位926－47年）の使節として926/27年にコンスタンティノープルに派遣された。「ところが、戻ってから数日を経た後、父は病に罹った。修道院に赴き、聖なる修道士の衣装を身に纏ったのだが、15日後に亡くなり、まだ幼子であった私を後に遺して主の下へと旅立って行った」（第３巻24章）。リウトプランドは聖職者としての道に足を踏み入れ、最終的にはパヴィーア司教教会の助祭に叙階された（年次は不明）。実母が再婚した継父も、941年に国王の使節としてボスポラス海峡の宮廷に派遣されている（第５巻14章）。

リウトプランド本人が、事実上のイタリア王国の支配者であるベレンガーリオ２世の使節としてコンスタンティノープルに初めて派遣されたのは、上記のように949年の夏である。翌950春に帰国するまでの滞在中、使節がコンスタンティノープル宮廷で極めて好意的な待遇を受けたことは、第６巻５～10章において活写されている。ただし、『報復の書』は、同10章の叙述をもって卒然と中断し、未完成に終わった。

リウトプランドはその後、イタリア国王に登位したベレンガーリオ２世（在位950－61年）とその妻と鋭く衝突し（原因は不詳）、アルプスを越えて東フランク国王オットー１世（在位936－、皇帝962－73年）の宮廷に亡命した。時期は、951～52年のオットーの第１次イタリア遠征以降、（後に『報復の書』の被献呈者となる）エルビラ司教レセムンドと956年２月にフランクフルト宮廷で邂逅する以前、この間のいずれかの時点である。

そのオットーの使節として再びコンスタンティノープル宮廷に派遣されたのは、959年頃であった。「さらに、この小著〔『報復の書』〕が虜囚の身で、あるいは彷徨の日々に著されたというのは、亡命者としての今日の境遇を指してのことです。それを最初に書き始めたのは、マインツから20マイル離れたフランクフルトにおいてでした。現在は、コンスタンティノープルから900マイル以上離れたパクソス島で執筆に勤しんでいるのです」（第３巻１章）。パクソス島はギリシアのケルキラ島の南方に位置する。リウトプランドはこの時、コンスタンティノープル宮廷へと向かう往路、もしくは復路において風雨を避けて避難していたと推定される。もっとも、他の史料による裏付けはなく、目的・背景の詳細は不明である――。

待望の司教位、しかも故郷のパヴィーア近郊のクレモナの座に抜擢されたのは、オットーの第２次イタリア遠征（961～65年）に随行中の961年末か962年初頭であった。皇帝戴冠を前に、オットーは、イタリアのみかビザンツの政情にも精通したランゴバルト人の傑出した教養と語学力、巧みな弁舌の才と交渉術、それに俊敏な政治的感覚に信を置いたのであろう。な

お、958年に開始した『報復の書』の執筆が中断されたのは、第６巻で962年２月２日に皇帝に戴冠されたオットーが、「当時は国王、現在は皇帝」（４、６章）と呼ばれていることから、２月以降のこととなる。

３度目となるコンスタンティノープル派遣は968年春である。背景にあるのは、オットーの第３次イタリア遠征（966～72年）で顕在化したビザンツ皇帝ニケフォロス２世フォーカス（在位963－69年）との外交的対立（二皇帝問題、南イタリアの領有問題）であった。リウトプランドの任務は、オットーの息子の若き共同皇帝オットー２世（在位967－83年）のために「緋室生まれの」后を請う求婚交渉であった。この最後の大仕事は見事なまでの失敗に終わったのだが、その顛末（及び自己弁護？）については、翌969年初の帰国後に著された『コンスタンティノープル使節記』が雄弁に語っている通りである。

ニケフォロスは同年末、甥のヨハネス・ツィミスケスが画策したクーデターで暗殺された。これを機に東西間の交渉が再開されることになる。オットー２世は最終的には、971年にケルン大司教ゲーロ（在位969/70－76年）が率いる求婚使節の交渉が一応成功したことで、その後皇帝位を襲ったヨハネス（在位969－76年）の妻の姪テオファーヌと翌972年４月にローマで結婚することとなった。12世紀（？）に記された『アメーリア司教聖ヒメリウス移葬記』の叙述によれば、リウトプランドは、ゲーロの使節に随行者として加わっており、翌972年のイタリア帰還前後の時期に病死したと推定される（この場合、享年約52となる）。『移葬記』の叙述の真偽の程は定かではないが、その信憑性に関して、近年の研究者は概ね肯定的である。

【リウトプランドとギリシア語】

以上のリウトプランドの出自とキャリアからすると、「かの者が如何に容易くギリシア語の教えを飲み干すか、それは余が語るまでもあるまい」というベレンガーリオの上記の言葉は首肯されるところであろう。

若き日のリウトプランドが学んだパヴィーアの宮廷学校は、当時のイタリアではミラノの司教座聖堂付属学校と並んで最も高い学問水準を誇る教養の中心地であった。特に自由七科のうち三学（トリウィウム）（文法・修辞・弁証）の秀逸さにおいて傑出していた。そこで、彼がとりわけローマ古典期の文学と熱心に取り組んだことは、『報復の書』の随所に膨大な量の文学作品の知識と技巧的表現が散りばめられていることから解る。

ラテン語の古典文学作品で特に利用頻度の高いのは、計63回のウェルギリウスを筆頭に、テレンティウス（39回）、キケロー（23回）、ユウェナーリス（17回）といった世俗的性格を強く帯びた古代ローマ時代の文学作品であり、中世のボエティウス『哲学の慰め』も18回を数える。

ギリシア語古典文学作品は、ホメロス『イリアス』とルキアーノス『にわとり』の各１回のみである。ルキアーノスは、当時アルプス以北ではほとんど知られていなかったシリア人の諷刺作家であるが、本文中でその名前に直接言及しているのが注目される（第１巻12章）。また、第３巻41章のティーレシアースの逸話については、直接の出典は確認されないが、ギリシア語古典作品（アポロドーロス、ホメロス、リュコプロン）の古注（スコリア）の利用が推定されている。

なお、刊本では６行に及ぶ長大な引用文は、全てギリシア語で書かれており、『報復の書』において最も長いギリシア語文である。『コンスタンティノープル使節記』26節では、当時としては極めて稀なことに、プラトンの『国家』までもが利用されている。ギリシア語学力の修得と文献利用は、949年と959年の２度に亘るコンスタンティノープル滞在の際になされたものと考えられる。

『報復の書』は、888年頃から950年までの歴史を対象とし、取り上げられるのはイタリア王国、ビザンツ帝国、東フランク王国の歴史である。叙述の分量的には、イタリアが全体の60％を占め、東フランク、ビザンツの各々20％がこれに続く。

他方、コーダーによれば、『報復の書』におけるギリシア語単語の使用は実に計357回に及ぶ。このうち約３分の１の118回は、ビザンツ以外の主題、すなわち本来ギリシア語表記を要しない文脈に属しており、著者のペダンチックな性向が数字にも表出している。一例を挙げるならば、ベレンガーリオ２世の父のイヴレーア辺境伯アダルベルトについてのギリシア語文がその典型である。「しかしながら、その後、評判は甚だ悪くなり、彼について次の如き真実の歌が老いも若きからも唱われる程になったのである。我々はそれをギリシア語で述べることとする、その方が響きが良いので。Αδελβέρτος κόμις κουρτης, μακροσπάθης, γουνδοπιστης. それが意味し言わんとしているのは、彼が用いる剣は長いものの、その誠実さは寸足らずである、ということである」（第２巻34章）。

最後に、『報復の書』におけるギリシア語の使用法について一言しておく。それは基本的には、①ギリシア文字による単語表記、②ラテン文字への転記（トランスクリプト）、③ラテン語翻訳、という構成を取る。例えば、「艦隊司令官」について、„① δελονγαρην της πλοῶς, ② *delongáris tis ploôs*, ③ *hoc est navalis exercitus principem*“（対格形）という形式である（第３巻26章）。３種類の系統本の成立過程から推定すると、第５巻の中途まで執筆した当初の時点では、ギリシア文字表記のみで、ラテン文字への転記はなく、ラテン語翻訳も７箇所のみであった。その後第６巻10章まで執筆していく過程で種々の改訂が加えられ、その際にギリシア文字表記のラテン文字への転記と翻訳の大幅な追加挿入、語義注釈の部分的補足が施された。これは想定される読者の語学水準を考慮したためであろうが、アルプス以北のオットー朝宮廷においてギリシア語に通じた知識人の数が極限されていた状況を考慮するならば、自らが「如何に容易くギリシア語の教えを飲み干したか」、それを誇示することで自己顕示欲を満たすと同時に、自身の高度な教養をアピールすることによって宮廷でポストを得ることが目的であった、そう考えるのが自然ではなかろうか。

２．リウトプランドに於ける中世ギリシア語（平野智洋）

ルネサンス以前の西欧人の一人として、リウトプランドはギリシア語の発音を当時のギリシア語話者即ち「ギリシア人」（他称）＝「ローマ人」（自称）＝「ビザンツ人」の発音、即ち中世ギリシア語（ビザンツ・ギリシア語）に従って記録していた。この事は、固有名詞トランスクリプト（転写）の事例から容易に知る事が出来る（例：ディアヴォリノス Διαβολίνος → *Diavolinos*）。

他方で、ラテン語由来の言葉など、置き換えが容易な言葉についてはそのままラテン語で記している（例：パトリキオス πατρίκιος →パトリキウス *patricius* など）。

リウトプランドによるギリシア語表記の選択は、必ずしも正書法表現に従ったものばかりではなく、時に日常使用の俗語表現が取り入れられることもあった。これは、コンスタンティノープル滞在中の聞き取りによるものと考えられる。例えば、艦隊司令官について、リウトプランドは対格形で δελονγαρην της πλοῶς, *navalis exercitus principem* と記している（第３巻26章）。同職の正書法表現（主格形）は、δρουγγάριος τοῦ πλοίμου である。様々な年代記資料ではリウトプランドと類似の表記が用いられることもあり、これが日常での使用と考えられる（詳細は個別の注解を参照）。また、アクセント記号については多くの箇所で脱落が見られる。

３．リウトプランドが描写するビザンツ帝国の官職・爵位と人物・事件（平野智洋）

【官職・爵位に関する全般的状況】

ビザンツ行政史の視点で見ると、リウトプランドの記録は、フィロセオスが記した宮廷儀礼式次第の手引書『クリトロロギオン』（*Klitrologion*, 899年頃成立）とコンスタンディノス７世ポルフィロゲニトス帝（在位913～959年）が記した『儀式の書』（*De Ceremoniis*）の中間に当たる[4]。『クリトロロギオン』はマケドニア朝初期までのビザンツ帝国に於ける行政組織の沿革を基準に書かれたものである。リウトプランド『報復の書』が網羅する時代は、まさにその行政制度史と重なるものであり、『クリトロロギオン』に示された原則が、いかなる形で実地に運営されているかという点について記録した史料としての価値がそこに見出される。殊に、ロマノス１世レカピノス帝の政権獲得過程を語る箇所（第３巻26章）、及びリウトプランド自身が臨席し目撃した賜金授与の儀式（第６巻10章）に際しては、リウトプランドは数多くの官職・爵位を熱心に記録し、列挙している。本解題もその箇所を中心に取り上げており、リウトプランドが伝えるビザンツ行政や政治的事情を理解する上で一助となることを期している。

【個別の注解】

（注記）ラテン文字・カナ転写はリウトプランド原文との対比にも鑑みて中世ギリシア語に基づく形で行った。訳文におけるカナ転写や、ビザンツ関連の日本語文献に於けるカナ表記と多少異なる点がある事を予めお断りしておく。

第１巻

５章（p. 12） *Leo Porphyrogenitus.*「レオン・ポルフィロゲニトス」（Cf. 6章・章題 : p. 14）
レオン６世とポルフィロゲニトス称号について

・原綴 : Λέων ／ラテン文字転写・カナ転写 : Leon- レオン

・原綴 : Πορφυρογέννητος ／ラテン文字・カナ転写 : Porphyrogennitos（Porphyrogennētos）- ポルフィロゲニトス（緋室生まれの皇子）／ラテン語表記 : Porphyrogenitus（Porphýrogenitus）

ポルフィロゲニトスは今上帝の息子としてコンスタンティノープル大宮殿内の緋室（ポルフ

ィラ）で生誕した皇子に与えられる称号である（６章以下）[5]。この慣習は少なくとも４世紀末に遡るものと考えられており、ラテン語史料では西ローマ皇帝ホノリウス（在位395～423）が「緋室にて生まれた」（*natus est Honorius … in purpuris*）事の記録が、またギリシア語史料でもテオドシウス２世（在位408～450）の緋室に於ける生誕（…ὁ…γεννηθεὶς νέος Θεοδόσιος ἐν τῇ πορφύρα）の記録が、それぞれみられる。またこの慣習から発生した尊称としての「ポルフィロゲニトス＝緋室生まれの皇子／皇女」の使用は、８世紀前後に始まっていたとみられるが、多くはイタリアのラテン語史料に事例が求められている[6]。ラテン語形はいずれも中世ギリシア語発音に準ずる形式となっている（上記転写一覧参照）。その後、少なくとも９世紀にはポルフィロゲニトスの呼称がビザンツ本国・ギリシア語圏でも使用されていた事は、コンスタンディノス７世編纂の『儀式の書』に収録された、ミハイル３世（在位842～867）の共治帝戴冠式（840年）の儀礼式辞等によって確認することが出来る[7]。

レオン６世（在位886～912）はビザンツに於ける多くの歴史書において、「賢帝」（σόφος）の尊称で呼ばれている[8]。著者不明の『皇帝歴代年代記』がレオンの息子コンスタンディノス７世を「最初のポルフィロゲニトス」（Κωνσταντῖνος, ὁ πρῶτος, ὁ πορφυρογέννητος, ὁ υἱὸς Λέοντος τοῦ σοφοῦ）と記しているように[9]、レオン６世にポルフィロゲニトスの尊称が付されることは殆どなく、コンスタンティノープル（現イスタンブル）城壁上の一銘文と、879年の教会会議文書に於いて、弟妹と共にポルフィロゲニトスとして記録されている事例等が知られているのみである[10]。

リウトプランドはレオン６世をポルフィロゲニトスと呼ぶ数少ない著述家であるといえるが、それには同帝の出自を巡る複雑な状況が影響している。レオンは父ヴァシリオス１世が共治帝に即位（866年５月26日）して間もない866年９月19日ないし12月１日に生まれているため「皇子」として生誕したことになるが、生誕の地についての詳細は判明していない。また、彼の父がヴァシリオス１世であったのか、先帝ミハイル３世であったのかについても不明である等の問題が存在している。こうした状況下、リウトプランドはラテン語圏ビザンツ領に於ける慣習、また彼が実地に検分した可能性のあるコンスタンティノープル城壁の銘文や教会会議文書をもとに、レオンにポルフィロゲニトスの称号を付しているものとみられる。

９章（p. 15） *cubicularii*「侍従」／ヴァシリオス（バシレイオス）１世とミハイル（ミカエル）３世の出会いについて

・原綴：κουβικουλάριος（sg.）- κουβικουλάριοι（pl.）／ラテン文字・カナ転写：kouvikoularios- クヴィクラリオス

元来は後期ローマ帝国宮内官（宦官）で、侍従長＝聖室長官（*praepositus sacri cubiculi*）の下僚として皇帝の寝室＝聖室（*sacrum cubiculum*）に属する。7-9世紀には宮内官階級の一つを形成し、具体的な職務として寝室管理長官、大膳家令（ἐπὶ τῆς τραπέζης- *epi tis trapezis*）などの宮内職に就任。財務長官や孤児院長などの文官職に就任した例も多数[11]。

ヴァシリオスと皇帝ミハイル3世との出会いについてはいくつかの挿話が伝わっている（荒馬を御する剛勇、ブルガリア人使節に同行した偉丈夫との決闘に勝利など）。彼が初めて皇帝

から与えられた官職は馬丁長官（πρωτοστράτωρ, *protostrator*: 850年頃就任）であり、侍従職への就任経験はない（侍従職の上長である寝室管理長官職には865年に就任している）[12]。

9-10章（pp. 16-18）ヴァシリオス１世によるミハイル３世の暗殺・贖罪とネア・エクリシア（「新聖堂」）建立について

ヴァシリオスを引き立てたミハイル３世が彼に疑念を抱き殺害を企み、それに対してヴァシリオスが皇帝の殺害という手段に訴えたという事件像はビザンツ側史料と概ね共通している。『続セオファニス年代記』収録「ヴァシリオス１世伝」はミハイル３世を「競馬と飲酒に溺れた暴君」と記すことでヴァシリオス帝の簒奪行為を正当化する論調をとるのに対し、事件より２世紀ほど後に記されたミハイル・プセロス『歴史概略』第98章「セオフィロスの息子ミハイル３世とその母セオドラ」は、ヴァシリオスによる皇帝弑逆と帝権獲得がやむを得ないことではあったものの、それを実行に移したという点で正当であるとは言えなかったと記しており、リウトプランドの論調に比較的近い[13]。

ミハイル３世暗殺とネア・エクリシア建立との関連については、プセロスは『歴史概略』第99章「マケドニア人ヴァシリオス１世」にて、帝位簒奪をより明確に「不法」「悪」と評した上で、彼が、「あたかも贖罪を求めるが如く」ネア・エクリシアを建立したと記している[14]。プセロスが記すように、ヴァシリオスの改悛が上辺だけのものであるかどうかはともかく、ここでの先帝弑逆の贖罪としての、「天の司令官」ミカエル（及び彼がとりわけ崇敬していた預言者エリヤ）に奉献されたネア・エクリシア建立という事件推移描写にはリウトプランドの記述との共通点が見られる。他方で『続セオファニス年代記』「ヴァシリオス１世伝」では聖堂はキリスト、大天使ガブリエル、預言者エリヤ、生神女（聖母マリア）、聖ニコラオスに捧げられたものと記されており、ミカエルの名はそこにはない[15]。聖堂は献堂初期に重要な宮廷儀式の場として使用された後、12世紀に修道院に転用されてビザンツ帝国末期まで活動の場となり、オスマン時代初期まで残っていたが、1490年頃に取り壊されている[16]。

第２巻

34章（p. 105）　ギリシア語部分の χόμις χουρτης, μαχροσπάθης を κόμις κουρτης, μακροσπάθης に改める。同称号については第６巻２章の注記を参照。

45章（p. 115）ἀνατολικαὶ, *anatolike, orientales*「アナトリカイ、すなわち東方の住民たち」

・原綴：ἀνατολικαὶ（Becker, 57）, –καί（正書法・鋭アクセント）／ラテン文字・カナ転写：anatolikai（anatolike）- アナトリケ

ここでのリウトプランドはギリシア語原綴、読み共に正確[17]。「東方の住民たち」の示すところは不分明であるが、922-923年にスホレ近衛隊司令官ヨアニス・クルクアスが帝国東方ハルディア地方におけるセマ・ハルディア司令官ヴァルダス・ヴォイラスの叛乱鎮圧のため遠征を遂行しており、リウトプランドはこの動向を示唆している可能性がある[18]。

第３巻

25章（pp. 170-171）Ρομανος, *Romanos*（p. 173: *Romanós*）

・原綴 : Ῥωμάνος ／ラテン文字・カナ転写 : Romanos- ロマノス

①ロマノス１世の出自 : ロマノスがアルメニア系農民の出身であった事は確かであるが、彼の父セオフィラクトス・アヴァスタクトスは871/872年に遠征中のヴァシリオス１世を窮地から救出した[19]ことで皇帝随員の地位と皇帝御料地（恐らく彼の新たな姓ラカピノス／レカピノス（Λακαπηνός, Λεκαπηνός）の語源となるラカピ村）を下賜されており、ロマノスがレオン６世の治世下で「貧しい」境遇に甘んじていたとするというリウトプランドの記述とは食い違いが見られる[20]。

②（p. 171）「ロマノスから事の次第を聞いた人々は皆」この同じ言葉をリウトプランドはギリシア語原文、ラテン文字転写、そしてラテン語訳の３種類の表記で記している。

③ *protocaravos*, προτοκαραβος 「艦長」

・原綴 : πρωτοκάραβος ／ラテン文字・カナ転写 : protokaravos- プロトカラヴォス

プロトカラヴォス＝軍艦首席操舵手は海軍司令官下僚で階級的には艦長職＝百人隊長（κεντάρχος- kentarchos）につぐ次位で、ドロモン軍艦の操舵手を職務とするものとされているが、史料・文献によっては「艦長」と解釈する事例もあり、その地位・職掌に関しては確定的ではない[21]。皇帝御召艦のプロトカラヴォスはプロトスパサリオス爵位を保有。ロマノス・レカピノスが経歴初期にこの職に就いていることを記しているのはリウトプランドのみである。

26章（pp. 172-174） ロマノス・レカピノスの政権獲得

リウトプランドはロマノスを、レオン６世・アレクサンドロス死去直後から政権獲得へ向けて行動していた周到な政治家として描写している。しかし実際にロマノスが政権獲得へ向けた動きを見せるのは、皇太后ゾイの信任篤いレオン・フォカスによる二度の対ブルガリア敗戦（917, 918年）後の危機的状況と宮廷の混乱を背景としたものであった。ただし、オストロゴルスキーはロマノスの政権獲得に見るその行動の素早さと周到さを認めている[22]。リウトプランドの記述を時系列順に整理すると、概ね26章前半→27章→26章後半→28章の順となる。

919年以降の動向、即ちロマノスによる首都制圧、娘エレニとコンスタンディノス７世との結婚（914年４月に婚約、５月７日に結婚）、ロマノスの帝父就任及びロマノスの皇帝即位（920年９月24日のケサル爵位叙任を経て12月17日に皇帝戴冠）という状況については、概ね他史料との整合性がとれている[23]。本章ではロマノスによる人事掌握過程として、差配された爵位・官職が列挙されているが（下記④～⑪）、その言及の順番は概ね位階通りとなっている。

① *parakinumenon* 「寝室管理長官」

・原綴 : παρακοιμώμενος ／ラテン文字・カナ転写 : parakoimomenos- パラキモメノス

パラキモメノス職は、６世紀以降、聖室長官（侍従長）職が実権を失うと、その職務を引き継いで皇帝の寝室管理長官職（侍従長格）となる。13世紀には寝室管理長官寝室付

（παρακοιμώμενος τοῦ κοιτῶνος－ parakoimomenos tou koitonos, パラキモメノス・トゥ・キトノス）と改称された[24]。

② δομεστικον μεγαν, *domesticum maiorem, terrestris ducem exercitus* 「野戦軍総司令官」（*domésticos tis ascalónas*「スコライ近衛隊司令官」－第６巻10章 : p. 329）

ⓐ原綴 : μέγας δομέστικος（sg. nom.）, δομέστικον μέγαν（sg. acc.）／ラテン文字・カナ転写 : megas domestikos- メガス・ドメスティコス＝野戦軍総司令官

ⓑ原綴 : δομέστικος τῶν Σχολῶν ／ラテン文字・カナ転写 : domestikos ton Scholon- ドメスティコス・トン・スホロン＝スホレ近衛隊司令官

10世紀ビザンツ陸軍司令官は地方軍・セマ司令官（ストラティゴス）と野戦軍司令官（ドメスティコス）の２系統が存在していた。スホレ近衛隊司令官はドメスティコス諸職の中でも最上位に位置づけられ、『クリトロロギオン』では官職順位５位に記録されている[25]。メガス・ドメスティコス職（リウトプランド以前には２名の事例）は、スホレ近衛隊司令官に由来する野戦軍総司令官職であり、リウトプランドの時代は両職が併存する状況にあった。11世紀以降、メガス・ドメスティコス職が帝国（陸）軍総司令官職として最終的に確立された[26]。リウトプランドのここでの記述は、μεγαν（sic）表記からみて、スホレ軍団司令官と野戦軍総司令官（後の帝国軍総司令官）を同一視していたものとみられる。

③ δελονγαρην της πλοῶς, *navalis exercitus principem* 「海軍司令官」（*delongáris tis ploôs*「艦隊司令官」－第６巻10章 : p. 329）

・復刻 : δελονγάρην τῆς πλοῶς（→ δελογγάρην τῆς πλοῶς）／ラテン文字・カナ転写 : delongaris tis plos- デロンガリス・ティス・プロオス

・原綴（正書法）: δρουγγάριος τοῦ πλοΐμου（－ τῶν πλοίμων）／ラテン文字・カナ転写 : droungarios tou ploimou- ドルンガリオス・トゥ・プロイム

ティヴェリオス３世（在位698～705）が即位前、海洋セマ・キヴィレオテの司令官としてドルンガリオス・トン・キヴィレオトン（δρουγγάριος τῶν κιβυρραιώτων）職に在職していたものがドルンガリオス職の初出とされている。その後、皇帝直属の艦隊司令官としてドルンガリオス・トゥ・プロイム職が創設された[27]。『クリトロロギオン』では官職順位38位[28]。中世ギリシア俗語では語尾 －ιος は －ης に転訛する事例が多数ある。リウトプランド原文のギリシア語も、ドルンガリス（δρουγγάρης, droungaris）の対格形（δρουγγάρην）を聞き取って記したもの。なおリウトプランドは子音 ng 音のスペルを νγ としているが、正しくは γγ である。また「船」（πλοός, πλοΐμος）は男性名詞のため、定冠詞 τῆς は本来 τοῦ である。

④ *rector* 「レクトル」（*rector domus*「宮殿長官」- 第６巻10章 : p. 329）

・原綴 : ῥάικτωρ ／ラテン文字・カナ転写 : rektor, raiktor- レクトル

レクトルは９世紀中葉の『ウスペンスキーの官職表（タクティコン）』或いはヴァシリオス１世或いはレオン６世の時代に遡る高級官職（帝父に次ぐ２位）。職能については議論があ

り、19世紀フランスの研究者レクリヴェンは元老院議長（*président du sénat*）職であると考えた[29]。しかし、同職の就任者の中には、貴顕を集めた元老院の長としては不相応な宦官及び神品（聖職者）の就任者も多く、10世紀後半に元老院議長職として新設されたプロエドロス＝「元老院全体議長」職と異なり、元老院との関連で記載・言及されていないことなどから、この学説には否定的な見解が提示された。実際の職能はリウトプランドが第６巻10章で示唆するような宮殿内部の管理職であり、儀式の執行にも携わっていたとみられている[30]。

⑤ *magister* 「マギストロス」

・原綴 : μάγιστρος ／ラテン文字・カナ転写 : magistros- マギストロス

・後期ローマの諸局長官（*magister officiorum*）に由来する爵位（同職は７世紀には儀礼的地位のみの名誉職）。8-9世紀以降史料に現れ、序列としては５番目となる[31]。８世紀にはかつての諸局長官同様に儀礼的職務を執行する一方、複数人の任命が確認され、被任命者には序列も付けられていた。またレオン６世の義父ザウヅィスは例外的に諸局長官名に精密に対応した爵位 μάγιστρος τῶν ὀφφικίων を保有した。９世紀の事例では高級文武官がパトリキオス位と共にこの爵位を終身保有した（既に職能は消失）。定員は10世紀初頭に12名で、リウトプランドの時代に24名まで増員されている[32]。

⑥ *patricius* 「パトリキオス」

・原綴 : πατρίκιος ／ラテン文字・カナ転写 : patrikios- パトリキオス＝貴族爵

・コンスタンティヌス１世（在位306～337年）によって導入された爵位で、近衛長官職等に対応する位階を保持。ゲルマン系の諸王にも授与された。ユスティニアヌス１世（在位527～565年）時代に被任命者が拡大され、９世紀にはプロトスパサリオスの一つ上の順位として高級武官に授与された[33]。12世紀初頭までに消滅したとみられている[34]。

⑦ *logothetam* 「ロゴテテース」 第６巻５章の駅逓長官に関する注記を参照。

⑧ *eparchos* 「首都長官」

・原綴 : ἔπαρχος ／ラテン文字・カナ転写 : eparchos- エパルホス

諸都市の行政長官。特に、首都長官（ἔπαρχος τῆς πόλεως, *eparchos tis poleos*）は古代ローマの都警長官（*praefectus urbi*）の後継として、首都に於ける警察業務等司法の権限を行使した上級官職。官職表でも司法職（κρίται, *kritai*）に分類される[35]。

⑨ *kitonítas* 「寝室係官」（*kitonitarum* －第６巻10章 : p. 329）

・原綴 : κοιτωνίτης ／ラテン文字・カナ転写 : kitonitis, koitonitis- キトニティス

寝室管理長官（旧侍従長職の後継）の下僚で、侍従（クヴィクラリオス）と共に皇帝寝室を管理する宦官の官職。職務の一つは寝室の扉の開閉[36]。

⑩ *protospathários, spatharocandidátos, spathários* 「プロートスパタリオス／スパタロカンディダートス／スパタリオス」

・原綴：πρωτοσπαθάριος, σπαθαροκανδιδάτος, σπαθάριος ／ラテン文字・カナ転写：protospatharios, spatharokandidatos, spatharios- プロトスパサリオス＝首席帯剣護衛爵、スパサロカンディダトス、スパサリオス

プロトスパサリオスは元来皇帝護衛の職能を有しており、スパサロカンディダトス、スパサリオスはその下僚であったとみられる。プロトスパサリオスはパトリキオスに次ぐ元老院階級向けの爵位として、セマ司令官（ストラティゴス）、野戦軍司令官（ドメスティコス）、財務長官（サケラリオス）の他、宦官などにも授与され、宝石付の襟章及び剣を徽章として保有した[37]。他２つの爵位は中級武官向けの爵位として記載されている[38]。

⑪ *parathalassitin* 「海事長官」

・原綴：παραθαλασσίτης ／ラテン文字・カナ転写：parathalassitis- パラサラシティス

首都長官の下僚。海事・港湾に関する司法（沿岸の警察機構）・管理職能を保持し、船舶航行の管理、商人の監督や商品査察、関税納入の監督などを担当した。11世紀にはその重要性が増し地位が上昇したが、12世紀末には消滅した[39]。

⑫ *pater vasilleos* 「皇帝の父」

・原綴：βασιλεοπάτωρ ／ラテン文字・カナ転写：vasileopator- ヴァシレオパトル＝帝父

レオン６世によって創設されたとされる官職で、皇帝の相談役・年少の皇帝の傅育役（家庭教師）としての職能を有していた。『クリトロロギオン』では官職の筆頭（第１位）に位置する[40]。フィロセオスは宮廷の称号を「爵位」と総称し、更にこれを「位票による爵位（親任爵位）」と「命令による爵位（布告爵位）」に区分する。前者が純粋な爵位称号で、後者は職能を持つ官職となる。ヴァシレオパトルは布告爵位即ち官職である[41]。

27-28章（p. 175-176）

Focás domesticus 「野戦軍司令官フォーカス」

・原綴：Φωκᾶς ／ラテン文字・カナ転写：Phokas- フォカス

『続セオファニス』によると、ロマノスはスホレ近衛隊司令官レオン・フォカスを警戒して度々使節や書簡を送って牽制に努める一方、フォカスと共に皇太后ゾイの信任を得ていた廷臣を遠ざけた。ロマノスの娘エレニとコンスタンディノスが結婚しロマノスが帝父に就任して程なく、フォカスは周辺の有力者や配下の軍団に推される形で叛乱に踏み切り、コンスタンティノープル対岸のフリソポリス（別名スクタリ、現ウスキュダル）を占領してハルキドン（カルケドン）まで進軍した。しかしロマノスの意を受けたコンスタンディノス7世から非難の書簡を送られ、有効な攻撃手段もなく支持者から見放された後、ロマノスが派遣した使節によって捕らえられて連行し、目潰しされた[42]。

オストロゴルスキーとブラウニングは、皇太后ゾイの摂政政府を聖職者中心の政権と見な

し、その崩壊後のレオン・フォカスとロマノス・レカピノスの競合関係を、ブルガリアの脅威を背景とした軍事指導者同士の主導権争いと解釈し、その上で、フォカスが貴族出身、レカピノスが帝国に仕えて出世した農民出身者であること、後者の策略が単純に前者を上回った事が勝敗を決したと結論づけている[43]。

第５巻

21章（pp. 296-297）

① *chrýsotriclinon* 「黄金の玉座の間」

・原綴 : Χρυσοτρίκλινος ／ラテン文字・カナ転写 : Chrysotriklinos- フリソトリクリノス

大宮殿広間の一つで、八角形のドーム（16枚の窓）を頂く。儀礼的な宴会等に用いられる。皇帝の玉座と卓、金銀をあしらった主賓用卓と2-4卓の来賓用卓が据え付けられていた。周囲にはいくつかの広間が接続していた。所在地に関しては大宮殿の南端にあると考えられている。フェザーストーンによれば、コンスタンディノス７世『儀式の書』の式次第から復元された外国使節歓待順路と、ラヴシャコス宮（Lavsiakos）跡とみられていた、大宮殿外郭・ヴコレオン宮殿近接の遺構群が合致するとの事で、黄金の玉座の間の位置もラヴシャコス宮と隣接の形で立てられていたとの指摘が為されている[44]。

② *Zucanistrii* ツュカニステリオン

・原綴 : Τζυκανιστήριον ／ラテン文字・カナ転写 : Tzykanistirion- ヅィカニスティリオン

名称はペルシア語源。大宮殿構内にある球技場でポロなどの競技に使用された。ヴァシリオス１世時代に取り壊されてネア・エクリシア（第１巻10章）が建てられ、新たな球技場が建てられた[45]。

22章（p. 298-300） レカピノス政権崩壊の状況について

①帝位継承順に関する問題 :『続セオファニス年代記』は、ロマノスが老齢と病気により、当初の協定に沿ってコンスタンディノス７世を正帝（筆頭皇帝）とする考えを抱いたのに対し、ステファノスが父、そしてコンスタンディノス７世の廃位を企てたと記している[46]。他方プセロス『歴史概略』では、ロマノス１世を筆頭、第二位にフリストフォロス、第三位にコンスタンディノス、第四位にステファノス、第五位をコンスタンディノス７世とし、更にその次にフリストフォロスの息子ロマノスを据えていたという。『歴史概略』はこの状況に慢心したコンスタンディノスとステファノスが父と義兄弟の廃位を企てたと記している[47]。

②政変の状況 : レカピノス兄弟による父ロマノスの隠退と修道士入り、コンスタンディノス７世の反撃と兄弟の捕縛、兄弟と父との対面、兄弟の配流・拘禁といったリウトプランドの記述は、概ね同時代史料との整合性が取れている（コンスタンディノスの死の噂を聞きつけた民衆を宥めるために球技場＝ヅィカニスティリオンに３人の皇帝が出席した挿話は、『続セオファニス』等では不在）。ただし『続セオファニス』によると、コンスタンディノス７世の反撃に助力した人物は、下記のミハイル・ディアヴォリノスではなく元修道士マリノス・アルギロ

ス、プロトスパサリオス爵ヴァシリオス・ペティノス、マヌイル・クルティキスの３名であった。彼らは共治帝ステファノスが父ロマノスをプロティ島へ追放することに助力した後、今度はコンスタンディノス７世に味方し、マリノスがトルニキオス一族（マケドニア系ではなくアルメニア系。レオンとニコラオスの兄弟）その他と共に饗応の席でステファノス・コンスタンディノス兄弟を捕らえた（捕縛のタイミングは、リウトプランドが伝える席次争いではなく、兄弟が口に肉を入れた時合いであったという）。この間、ヴァシリオス・ペティノスはパトリキオス爵・皇帝親衛隊長に、元修道士マリアノス・アルギロスはパトリキオス爵・厩舎伯に、マヌイル・クルティキスはパトリキオス爵・偵察督戦司令官にそれぞれ叙任されている[48]。

③後日の処理：ステファノスはプリコニソス島、ロドス島を経てミティリニ島に配流された。コンスタンディノスはテネドス島を経てサモスラキに配流され、勅令でプロトスパサリオス爵ニキタスが監視役となり、後年獄吏達に殺害された。遺体は丁重に運ばれ、敬意を以て、彼の最初の妻エレニの側に葬られたという。ロマノスの長子・共治帝フリストフォロス（931年８月死去）の息子の内、長子ロマノス（923年頃生）は皇帝称号を与えられていたが夭折した（928-931年間）。次子ミハイル・ポルフィロゲニトスも皇帝に準ずる装い（サンダル）を与えられていたが、コンスタンディノス７世はこれを没収し、代わりにマギストロス爵・レクトル職を与えた（963年頃までは宮廷で活動していたことが知られている）。ステファノスの息子ロマノスとコンスタンディノスの息子ロマノスは共に去勢された。

『続セオファニス』は当初レカピノス兄弟の陰謀に加わってロマノス帝を追放し、寝返りによってコンスタンディノス７世の復権に助力して地位を得た者達の末路を冷ややかに記している。ペティノスは追放されて配流先で死去し、アルギロスは妻に丘上から真っ逆さまに突き落とされて「ユダの最期」を迎え（963年頃）、クルティキスはクレタ島を航行通過中に船ごと沈み、更にもう一人の加担者、司令官ディオゲニスはマレレイノスの２人の護衛官に槍で突かれて死んだという[49]。

④ *Diavolinos*　ディアヴォリノス

・原綴：Διαβολίνος ／ラテン文字・カナ転写：Diavolinos- ディアヴォリノス

ここでリウトプランドは彼の姓（もしくは渾名。マケドニアの都市デアヴォリス、もしくは「悪魔」に関連する名前）について、正確に当時の中世ギリシア語発音を転写している。『続セオファニス年代記』第６巻「コンスタンディノス・ポルフィロゲニトス伝」ではディアヴォリノスは944年のクーデターではなく、947年12月に、配流中の廃帝ステファノスを連れ出して皇帝に推戴するという計画をコンスタンディノス７世に伝えた人物として記されている[50]。

第６巻

２章（p. 319）*Andream quendam, qui ab officio comis curtis*「その官職において宮中伯と呼ばれるアンドレアス」

①ここでの「伯」が示す官職には２つのものが想定される。

ⓐ原綴：κόμης τῆς κόρτης（Cf. p. 105: κόμις κουρτης）／ラテン文字・カナ転写：komis tis kortis- コミス・ティス・コルティス＝幕営伯（宮中伯）

セマ司令官属僚の一つ。皇帝親征に際し、部下となる幕営担当官（*cortinarii*）と共に皇帝の露営する幕営を設置し、偵察督戦司令官に同行して陣営の夜警巡回を担当するなどの職務を負う。セマ司令官の使節としての任務なども担当する。語源はイタリア語での可能性が示唆されており、イヴレーア辺境伯アダルベルト（第２巻34章 : p. 105）に付されたギリシア語称号もこの役職に由来している。就任者はスパサリオスの爵位を保有する事もある[51]。

ⓑ原綴 : κόμης τοῦ σταύλου（στάβλου）／ラテン文字・カナ転写 : komis tou stavlou- コミス・トゥ・スタヴル＝厩舎伯

後期ローマの官職 *praepositi stablorum, comites stabuli* に由来。６世紀、ユスティヌス２世の兄弟バドゥアリウスに初めて皇帝厩舎伯（κόμης τῶν βασιλικῶν σταύλων）として授与された。皇帝の厩舎にて馬・驢馬の管理を担当。同職は13世紀に転訛形の傭兵軍司令官（μέγας κονόσταυλος, megas konostavlos）に改変、職能も傭兵軍の司令官職に転換された。

②アンドレアスについて : 945年にロマノス・レカピノスの息子達の排除に助力した人物として、厩舎伯マリアノス・アルギロスなる人物が知られている[52]。従って、アンドレアスは彼の後任であるか、「宮中伯」が別の官職即ち幕営伯に相当していた可能性がある[53]。

５章（p. 323-324）

① *Magnaura* 「マグナウラ」／ *quae a Grecis per V loco digammae positam*「ギリシア人はディガンマの代わりにＶを用いて」

・原綴 : Μαγναύρα ／ラテン文字・カナ転写 : Magnavra- マグナヴラ

リウトプランドが述べる「v」発音に関して、中世ギリシア語では、二重母音 αυ は母音・流音（λ, ρ）等の前では音価が［av］となるため「マグナヴラ」（*Magnavra*）と発音する。語源は、一般にリウトプランドが記しているように、「大ホール」（*magna aula*）であると考えられている。他方で、10世紀に編纂された『パトリア（祖国記）』はギリシア語としての語源説明を試みている。それによると、アナスタシウス帝（在位491～518年）の治世晩年に宮殿への落雷があり、恐怖を覚えて逃げ回っていた彼は自室の一つで落雷の直撃を受け、火だるまになってしまった。火に巻かれて死に行く彼が、最期に「おお母（μάνα– *mana*）よ、私は［火の］光（αὔρα– *avra*）によって死にまする」と叫んだ声を廷臣達が聞いた。そのため、この広間のことをマナヴラ（Μαναῦρα– Manavra）と呼ぶようになったという[54]。

マグナヴラ宮殿は大宮殿北東脇、元老院議会場（アヴグステオン）の側にある儀礼用の宮殿広間。バシリカ聖堂型の建物で、東側には後陣をもつ。後陣には玉座に着くソロモンの壁画が描かれていた。建物は外国からの使節を迎える用途で使用され、リウトプランドも記す自働の機械仕掛けが皇帝入来の演出を行った[55]。この機械仕掛け「驚きの装置」（θαυμαστὰ ὄργανα– thavmasta organa）について、12世紀のミハイル・グリカス『年代記』はセオフィロス帝（在位829～842年）が作らせたものであると記しており、リウトプランド同様、金箔を被せた木に鳥が止まり、旋律を奏でる仕掛けになっていたという。この機械仕掛けは当時の偉大な数学者レオンが設計・製作したものであったが、ミハイル３世の時代に、金に困った皇帝が解体し貴金属を抜き取ってしまったとグリカスは伝えている[56]。

②（p. 324）*logothetam* 「ロゴテテース」

・原綴 : λογοθέτης ／ラテン文字・カナ転写 : logothetis- ロゴセティス

ロゴセティス・トゥ・ゲニク（λογοθέτης τοῦ γενικοῦ, logothetis tou genikou）＝税務長官、ロゴセティス・トゥ・ドロム＝駅逓長官（λογοθέτης τοῦ δρόμου, logothetis tou dromou）、ロゴセティス・トゥ・ストラティオティク（λογοθέτης τοῦ στρατιωτικοῦ, logothetis tou stratiotikou）＝軍政長官など文官諸局の長官を総称したもの。7世紀以降、近衛長官（*praefectus praetorio*）に代わり行政諸局の長官職として定着した[57]。皇帝からリウトプランドに取り次いだこのロゴセティスは職務から見て駅逓長官（内外の情報収集を行い、外交の任務も執行する。外交使節の歓待もその職務）であると考えられるが、詳細は不明。

8章（pp. 326-327） *Decanneacubita* 「デカネア館」

・原綴 : στέγη τῶν δεκαεννέα ἀκουβίτων ／ラテン文字・カナ転写 : stegi ton dekaennea akouviton- ステギ・トン・デカエネア・アクヴィトン

『続セオファニス』では建物の外見のみ描写がある。八角形の建造物で、開口部は湾曲し、それぞれは金を被せられた葡萄の蔓・葉・幹などがかたどられているという[58]。

10章

本章でリウトプランドが言及しているのは、爵位に対する賜金（ロガ）の授与である。言及される各爵位については第3巻第26章の注記を参照。

①（p. 328） vaiophóron「枝の主日」

・原綴 : Κυριακὴ τῶν βαΐων（βαϊοφόρον）／ラテン文字・カナ転写 : Kyriaki ton vaion- キリアキ・トン・ヴァイオン＝聖枝祭

「聖枝祭」は正教の用語。ギリシア語表記としては（ἡ βαΐων ἑορτή– i vaion eorti）の形もある。リウトプランドが記す「ヴァイオフォロン」（中世ギリシア語の発音をそのまま写している）は直訳では「枝を持ち運ぶ日」という意味となる。本来はナツメヤシ（φοίνικη– phoiniki, フェニックス類の総称）の枝となるが、ビザンツ世界では様々な枝が用いられており、テンニンカ（βαΐα– vaia）の枝を手に持って儀礼に参加した記録もある[59]。

② *manglavitarum* 「棍棒警護隊」

・原綴 : μαγγλαβίτης, μαγκλαβίτης（sg.）, μαγγλαβῖται, μαγκλαβῖται（pl.）／ラテン文字・カナ転写 : manglavitis/ manglavitai- マングラヴィティス（単）・マングラヴィテ（複）

大宮殿警護部隊の一つ。皇帝の外行時、皇帝親衛隊と共に先導役・先行役を務め、通行の妨げとなる者達を遠ざけるため、鎚矛（メイス）及び棍棒（マングラヴィティスの語源）か鞭を誇示する役割を担う。また、皇帝親衛隊（ἑταιρειάρχης, etairearchis）を補佐して、大宮殿の門を警護する（毎朝の解錠・開門任務を含む）。皇帝に随行して、親衛隊及び侍従達と共にマグナヴラ宮殿の広間に配置を執る。儀式に於いては帯剣する。『ウスペンスキーのタクティコン（官職表）』（842～843年頃）によれば、隊員達はスパサリオス或いはカンディダトスの爵位を保有するとされている[60]。他方で、『クリトロロギオン』ではスパサロカンディダトスまた

はスパサリオス爵位を保有し、退役後はプロトスパサリオス爵位に昇格するとされている[61]。

註

1 クレモナのリウトプランド『報復の書』／ヴァイセンブルクのアーダルベルト『レーギノ年代記続編』、三佐川亮宏 訳注、知泉書館、A5判、554頁（『報復の書』は3-330頁）。
底本としたのは次の２点の刊本である。*Antapodosis*, in: *Die Werke Liudprands von Cremona*, hg. v. Josef Becker, (Monumenta Germaniae Historica, Scriptores rerum Germanicarum, [41]), Hannover-Leipzig 1915, S.1-158. *Antapodosis, in: Liudprandi Cremonensis opera omnia*, cura et studio Paolo Chiesa, (Corpus Christianorum, Continuatio Mediaevalis, 156), Turnhout 1998, pp.1-150. なお、本訳書の刊行に際しては、令和５年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受けることができた。

2 以上の事情から、本稿では文献注は基本的に割愛することとした。個々の典拠は訳書の「解説」の注を参照されたい。

3 リウトプランド、大月康弘訳『コンスタンティノープル使節記』知泉書館 2019年、47節（邦訳85頁）:「他のことではしばしばお喋り好きで饒舌と見られる私ですが・・・」。

4 『クリトロロギオン』のテクストは、J. B. Bury, *The Imperial Administrative System in the Ninth Century: With the Revised Text of the Kletrologion of Philotheos*, London, 1911 (*The British Academy Supplemental Papers*: 1) に収録されているものを参照した。また、井上浩一『ビザンツ帝国』岩波書店, 1982年, pp. 125, 128-130にも、『クリトロロギオン』で列挙されている爵位及び官職一覧が表として記載されており、こちらも参照されたい。『儀式の書』のテクストは Constantin Porphyrogénète, *Le Livre des Cérémonies*, t. I-II, text établi et traduit par A. Vogt, Paris, 1967を参照した。

5 概要は以下の研究を参照。A. P. Kazhdan (ed. in chief), *The Oxford Dictionary of Byzantium*, I-III, Oxford, 1991(以下 ODB と略す), p. 1701 (Porphyrogennetos); G. Dagron, “Nés dans la pourpre,” *Travaux et Mémoires* 12 (1994), 105-142; A. G. K. Savvidis, *Βυζαντινές ποφύρες και πορφυρογεννήτοι: έννοιες και συνειρμικοί συμβολισμοί*, Peiraias, 2023.

6 Savvidis, *πορφυρογεννήτοι*, pp. 37-39.

7 *Livre des Cérémonies*, t. II. pp. 4, 24-25.

8 レオン6世の出自と経歴については、下記を参照のこと。ODB, pp. 260 (Basil I), 1210-1211 (Leo VI); “Leon VI. (no. 20837),” R.-J. Lilie, C. Ludwig, B. Zielke, T. Pratsch, *Prosopographie der mittelbyzantinischen Zeit Online*(https://www.degruyter.com/database/PMBZ/html), 2023年08月23日取得（以下、*PMBZ Online* と略す）; S. Tougher, *The reign of Leo VI (886-912): politics and people,* Leiden, 1997 *(The medieval Mediterranean : peoples, economies and cultures, 400-1453*: 15), esp. pp. 23-41, 110-132; 尚樹啓太郎『ビザンツ帝国史』東海大学出版会 , 1999年 , pp. 438-447.

9 P. Schreiner (ed.), *Die Byzantinischen Kleinchroniken (Chronica Byzantina Breviora)*, T. I-III, Wien, 1975-1979 (*CFHB* 12), I. p. 139 (Ch. 14: 51). 『儀式の書』の事例に見られる様に、称

号自体が９世紀既に使用されていた事は疑いないが、この年代記の記事は、ポルフィロゲニトス称号がコンスタンディノス７世個人と強く結びついていたことを示すものであるといえる。

10 Savvidis, *πορφυρογεννήτοι*, pp. 43-44.

11 ODB, p. 1154 (koubikoularios); R. Guilland, *Recherches sur les institutiones Byzantines*, t. I-II, Berlin, 1967 (*Berliner Byzantinischen Arbeiten* 35), I. pp. 269-282.

12 ヴァシリオス１世に関しては、さしあたり、尚樹『ビザンツ帝国』pp. 428-430の他、*PMBZ Online*（注8）より“Basileios I. (no. 24311)”を参照。

13 *Theophanes continuatus, Ioannes Cameniata, Symeon Magister, Georgius Monachus,* ed. I. Bekker, Bonn, 1838, pp. 208-210; *Michaelis Pselli Historia syntomos*, ed. W.J. Aerts, Berlin-New York 1990(*CFHB* 30), pp. 88-90.

14 *Hist. syntomos*, p. 90.

15 *Theophanes continuatus*, p. 325.

16 建造物の概要は ODB, p. 1446(Nea Ekklesia) を参照。

17 訳文の ἀνατολιχαὶ は ἀνατολικαὶ に改められる。

18 集団名としてのアナトリケ（アナトリカイ）、行政単位・地名としてのアナトリコン及び司令官ヨアニス・クルクアスに関しては下記を参照。ODB, pp. 89-90(Anatolikon), 1157 (Kourkouas, John); Guilland, *Institution*, I. p. 442; “Ioannes Kurkuas (no. 22917),” *PMBZ Online*（注8）; 中谷功治『テマ叛乱とビザンツ帝国 : コンスタンティノープル政府と地方軍団』大阪大学出版会 , 2016, p. 48.

19 *Hist. syntomos*, p. 88.

20 ロマノス１世初期の経歴については、下記を参照。S. Runciman, *The Emperor Romanus Lecapenus and his reign: a study of tenth-century Byzantium*, Cambridge, 1963, pp. 63-65; ODB, pp. 1203-1204 (Lekapenos), 1806 (Romanos I. Lekapenos); “Romanos I. (no. 26833),” “Theophylaktos Abastaktos (no. 28180),” *PMBZ Online*（注8）. ライオン退治のエピソードについて、ランシマンは特に真偽等の検証や他史料証言との比較なく列挙するに留めている。

21 ODB, pp. 1120-1121 (kentarchos), 1745 (protokarabos); Guilland, *Institution*, II. pp. 114, 536, 538.

22 Ostrogorsky, *History*, pp. 263-264; 尚樹『ビザンツ帝国史』p. 463.

23 Cf. *Theophanes cont.*, pp. 394-398.

24 ODB, pp. 1709(praepositus sacri cubiculi), 1584(parakoimomenos); Guilland, *Institution*, I. pp. 202-215.

25 Bury, *Administrative System*, p. 136. Cf. ODB, pp. 646-648(domestikos, domestikos ton scholon); Bury, *Administrative System*, pp. 47-49(δομέστικοι), 49-57(δ. τῶν Σχολῶν, δ. τῶν ἐξκουβίτων); Guilland, *Institution*, I. pp. 426-468.

26 ODB, pp. 1329-1330(megas domestikos); Bury, *Administrative System*, pp. 47-60; Guilland,

Institution, I. pp. 405-425.

27 ODB, pp. 663-664(droungarios, droungarios tou ploimou); Bury, *Administrative System*, pp. 108-111; Guilland, *Institution*, II. pp. 535-562.

28 Bury, *Administrative System*, p. 137.

29 Cf. Guilland, *Institution*, II. p. 212. 井上『ビザンツ帝国』p. 128の訳語もこの解釈によっている。

30 ODB, pp. 1787-1788(rhaiktor); Guilland, *Institution*, II. pp. 212-219; Bury, *Administrative System*, pp. 115-116.

31 Bury, *Administrative System*, p. 146.

32 ODB, pp. 1266-1267(magister officiorum, magistros); Bury, *Administrative System*, pp. 29-33; 尚樹啓太郎『ビザンツ帝国の政治制度』東海大学出版会 , 2005年 , p. 71, 75.

33 Bury, *Administrative System*, pp. 146-148.

34 ODB, p. 1600(patrikios); Bury, *Administrative System*, pp. 27-28; Guilland, *Institution*, II. pp. 178-202; 井上『ビザンツ帝国』p. 125.

35 ODB, pp. 704(eparch), 705(eparch of the city); Bury, *Administrative System*, pp. 69-73.

36 ODB, p. 1137(koitonites); Guilland, *Institution*, I. pp. 202, 269.

37 Bury, *Administrative System*, pp. 148-150; 井上『ビザンツ帝国』pp. 125-126. Cf. ODB, p. 1748(protospatharios); Bury, *Administrative System*, p. 27; Guilland, *Institution*, II. pp. 99-131.

38 Bury, *Administrative System*, pp. 150-153; 井上『ビザンツ帝国』p. 125. Cf. ODB, pp. 1935-1936(spatharios, spatharokandidatos); Bury, *Administrative System*, pp. 26-27.

39 ODB, pp. 1586-1587(parathalassites); Bury, *Administrative system*, p. 73.

40 Bury, *Administrative system*, p. 136; 井上『ビザンツ帝国』p. 128.

41 Bury, *Administrative system*, p. 146. Cf. *Ibid*., pp. 114-115; ODB, p. 263(basileopator); 井上『ビザンツ帝国』p. 128; 尚樹『ビザンツ帝国史』p. 439; 尚樹『政治制度』pp. 71-72.

42 *Theophanes cont*., pp. 394-397.

43 Ostrogorsky, *History*, pp. 263-264; 尚樹『ビザンツ帝国史』p. 463; ロバート・ブラウニング(金原保夫訳)『ビザンツ帝国とブルガリア』東海大学出版会 , 1995, pp. 74-77. Cf. "Leon Phokas (no. 24408)," *PMBZ* Online（注8）.

44 J. M. Featherstone, "The Great Palace as Reflected in the De Ceremoniis," in F. A. Bauer (ed.), *Visualisierungen von Herrschaft, Byzas* 5 (2006) pp. 47–61. この解釈は、大宮殿の外壁がヴコレオン宮殿に接続する範囲にまで拡大されていた事も示す。その他の学説については、さしあたり下記を参照。ODB pp. 455-456(Chrysotriklinos), 869-870 (Great palace); K. Wessel (hrsg.), *Reallexikon zur byzantinischen Kunst*, Stuttgart, 1966-, IV. p. 410（Abb23; 以下、RLBK と略す）.

45 ODB, p. 2137(Tzykanisterion); RLBK, IV. p. 410(Abb23).

46 *Theophanes Cont*., p. 435.

47 *Hist. syntomos*, p. 92.

48 *Theophanes Cont.*, pp. 435-438.

49 *Theophanes Cont.*, p. 438.　この項に登場した各人物については以下を参照のこと。“Stephanos Lakapenos (no. 27251),”“Konstantinos Lakapenos (no. 23831),”“Basileios Peteinos (no. 20934),”“Marianos Argyros (no. 24962),”“Manuel Kurtikes (no. 24878),”“Leon Tornikios bzw. Tornikes (no. 24424),”“Nikolaos Tornikios (no. 25961),”“Diogenes (no. 21542),”“Christophoros Lakapenos (no. 21275),”“Romanos Lakapenos (no. 26840),”“Michael Porphyrogennetos (no. 251740) , *PMBZ Online*（注8）.

50 *Theophanes continuatus*, p. 441.　彼の個人情報に関しては、“Michael Diabolinos (no. 25183),”*PMBZ Online*（注8）を参照。

51 ODB, p. 1139 (komes tes kortes); Bury, *Administrative System*, pp. 41, 43(κόμης τῆς κόρτης); Guilland, *Institution*, I. pp. 469-477.

52 Guilland, *Institution*, I. p. 470.

53 ODB, pp. 1140 (komes tou staulou), 1147(konostaulos); Bury, *Administrative System*, pp. 113-114(κόμης τοῦ σταύλου); Guilland, *Institution,* I. pp. 469-477（アンドレアスへの言及なし）．アンドレアスについては、“Andreas (no. 20370),”*PMBZ Online*（注8）参照。PMBZ電子版では幕営伯の可能性を採りつつ、併記の形を取る。

54 *Accounts of Medieval Constantinople: the Patria*, trans. A. Berger, Cambridge, Mass.- London, 2013, p. 212.『儀式の書』でもマナヴラ宮殿 (Μανναύρα) の名前で記載されている。*Livre des Cérémonies,* t. II. p. 6.

55 概要は下記参照。G. Brett, “The Automata in the Byzantine ‘Throne of Solomon,”*Speculum* 29/3 (1954), pp. 477-497; ODB, pp. 235(automata), 1267-1268(Magnaura); RLBK, IV. pp. 410-417(Abb23).

56 *Georgii Monachi Chronica* (in *Theophanes cont.*, ed. I. Bekker, Bonn, 1838), p. 793; *Michael Glycae Annales*, ed. I. Bekker, Bonn, 1836, pp. 536-537, 540, 543.

57 ODB, pp. 1247-1248(logothetes, logothetes tou dromou, l. tou stratiotikou, etc.)；Bury, *Administrative System*, pp. 86-93(λογοθέτης τοῦ γενικοῦ, τοῦ στρατιωτικοῦ, τοῦ δρόμου) etc.

58 *Theophanes cont.*, pp. 449-450.

59 ODB, p. 1566 (Palm Sunday).

60 ODB, p. 1284(manglabites); Bury, *Administrative System*, p. 108; Guilland, *Institution*, I. p. 305.

61 Bury, *Administrative system*, pp. 150-151.

The *Antapodosis* of Liutprand of Cremona
—— some commentaries on Greek phrases and terms ——

Akihiro MISAGAWA and Tomohiro HIRANO

Abstract

The purpose of this paper is to provide some commentaries for a Japanese translation of the *Antapodosis* of Liutprand (ca. 920-972 ?), the bishop of Cremona (961/2-972 ?), especially on Greek phrases and terms in its text. Liutprand mentions about the historical events of the Byzantium during the reigns of Leon IV (886-912) and Konstantinos VII Porphyrogennitos (913-959). Frequently using Greek, he records the topography of the palace quarter in Constantinople, and describes about court ceremonies, titles and offices which he himself was eyewitness. In comparison with contemporary sources, account of Liutprand is relatively accurate, and provides various important information about the Byzantine empire in the 10th Century.